

不易と流行

文学部長 湯浅信之

「チェンジ」を旗印にアメリカの新政権が誕生した。日本でも社会の様々な面でも変革が求められている。大学にも変革の波は急速に押し寄せている。そのスピードは余りにも早く、「学際化」「国際化」「情報化」などといった変革のキャッチ・フレーズが一夜に色褪せてしまう程である。このような時に、去来が師芭蕉の教えとして述べている「不易を知らざれば、基立ちがたく、流行を弁へざれば、風新たにならず」という言葉を想起することは無意味ではあるまい。



大学にとって不易とは何か。それは学問である。流行とは何か。それは社会のニーズに応えて行くことである。この両面がうまく機能してはじめて大学は存在する権利を獲得するのである。大学全体として見た場合は、どうも流行を追う議論ばかりが先行しているようである。文学部のような虚学を主体にやっているところは必要だと考えられているような妄想に陥ることすらある。これでは大学の「基立ちがたく」と言わねばならない。しかし、文学部自体について考えるならば、もう少し流行を求めてもよいのではないかと思っている。私自身、毎年提出される卒業論文や研究論文の旧態依然とした題目には少々疑問を抱いている。学問の名人は「危き所に遊ぶ」ことを旨とすべきであろう。

部長になっても挨拶の言葉のない私の駄弁としてお読み頂ければ幸いである。最後に、移転の年に当り皆様の御協力をお願いしたい。

学統を生かし研究の高度化、

多様化、国際化を図る

教育学部長 小笠原道雄



御多分にもれず、自己点検・自己評価ということ、教育学部の理念、目標、使命を確認すべく、新制広島大学教育学部の設置に関する調書をみると、ガリ版刷の第一頁に、目的、使命が格調高く掲げられている。「広島大学教育学部は学校教育法第五十二条の精神にのっとり広島文理科大学の教育的伝統を生かし教育の原理及び技術を教授研究し教育に関する研究者、技術者並びに教育者としてふさわしい知的道德的及び応用的能力を展開させることを使命とする」。新しい学部の創設にあたって先達の篤い思いが滲み出ている。

わが国の大学史上、第三の大改革といわれる昨今、教育学部、教育学研究科のおかれている状況はまことに厳しい。その中で、先の学統を生かし、教育諸科学の高度化、多様化、国際化をどのように図り、学部の個性化をいかに実現するか。

高度化といった側面では、教育学研究科の実績を点検し、大学院の講座化を図ること。多様化の面では、社会人の受け入れ、とりわけ、高等師範学校以来の実績でもある中等学校教員を大幅に受け入れ、伝統を保持し、社会の要請に応えること。国際化の面では、留学生の受け入れと同時に、交流協定を結んでいるミネソタ大学、アムステルダム大学、チュラロンコン大学を核に教育研究の交流を果たしていくこと等である。学部構成員の合意形成を図りながら、全学の御支援をいただき、上記三点の実現に微力ながら尽力したく、念じている次第である。